

江戸時代におけるあとひとつの医の倫理の標語

著者	関根 透
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	6
ページ	25-37
発行年	2001-04
URL	http://doi.org/10.24791/00000516



江戸時代におけるあとひとつの医の倫理の標語

関根 透

(一)

江戸時代における医の倫理の標語と言え、**「医は仁術なり」**が最も人口に膾炙された言葉であろう。他に「**医は意なり**」という言葉も、医師が病人に誠意をもって治療するという倫理的な標語として、医師がよく座右の銘として用いていた。まず、人口に膾炙した標語である「**医は仁術なり**」については、既に拙著で詳述しているので¹⁾、簡単に述べてから、本題の「**医は意なり**」について説明することにしよう。

「**医は仁術なり**」の流行は徳川幕府の文教政策に深く関係している。徳川幕府は、その成立において、支配体制の根柢を古代中国の道に求めた。そこで、徳川家康は、幕藩的封建制度を確立するとともに、その正当性を朱子学者の藤原惺窩に求めようとした。しかし、藤原惺窩は家康による再三の仕官の要請にもかかわらず、出仕を辞退し、市井の人として自らの研究に邁進したのである。彼は自分の代わりに弟子の林羅山を推挙した。以後、林羅山は家康から厚い信任を得て、慶長十二年（一六〇七）には、秀忠の学問指南役に任命され、さらに家光、家綱と四代に亘って侍講を勤めるのである。

林羅山が説く朱子学は、道德的規範も天地の法則に基づいていると考えて、人倫の秩序である身分階級も正当なものであると説いた。この羅山の説は、幕藩体制の封建制度を正当化するもので、徳川幕府にとっては大變好都合な説であった。藤原惺窩と林羅山の説は多少異なっており、惺窩はものの道理を弁えた上で、実行に移すという「先知後行説」を唱えていた。一方、羅山は道德規範も天地の法則に基づくもので、封建的身分階級も是認する「名分論」を展開したのである。こうした羅山の説は徳川幕藩体制の精神的支柱となつて、武士に限らず一般庶民に至まで大きな役割を演じていくのである。

その文教政策は強力に推進され、林羅山は幕府において手腕を發揮していったのである。彼は長崎より入手した『本草綱目』を基に『多識篇』を上梓して、寛永十四年（一六三七）にはそれを將軍に献上した。それは、李時珍が一五九六年に著した本草書で、それを抄出したものが『多識篇』である。『本草綱目』の序文には「仁心」、「仁声」、「仁術」、「仁政」の言葉が再三示されて^②、「仁」こそが徳川幕府の最高の徳目であると解されるようになった。そこで、医師たちは林羅山から『本草綱目』の知識や精神を求めるとともに、医療の根本精神も学ぼうとしたのである。

これより先に、後世派の礎を築いた曲直瀬道三は、弟子に「医療の心」として「慈仁」の大切さを示した。道三医学の免許皆伝を示す『道三切紙』の第一条において「慈仁」の二字を医療の根本精神として示した^③。この言葉が弟子の間で普及するとともに、林羅山の「仁」の精神と相俟って、医療においても「仁」こそが医療の根本的精神と捉えられるようになったと思われる。つまり、この「慈仁」の先行があつたからこそ、「医は仁術なり」が円滑に医師の間に受け入れられたのである。

すでに、室町時代に輸入されていた医学書『古今医統大全』の第三之下「医道」の中において、「医は仁術」と

言う言葉を医師たちは見出だしたのである⁽⁴⁾。その言葉が徐々に医師の間で医療の本質の如く語られるようになり、さらにそれが広く社会の中で流行するようになったと思われる。この徐春甫著の『古今医統大全』の輸入以前に、日本には張杲の『医説』の「医は仁術」と言う言葉が入っていた。しかし、流行になった医の倫理の標語「医は仁術なり」は、直接には『古今医統大全』から引用されたものである⁽⁵⁾。

こうして江戸時代においては、「医は仁術なり」が医の倫理の標語として庶民の間にまでも広まっていったのである。現在でも、この標語は病人側が医療者側に倫理を求める言葉として生きている。しかし、本来、これは医療者側が自分たち自身に求めたパターンリズムの医の倫理を意味した言葉である。

(二)

「医は意なり」と言う標語も、江戸時代において医師の間では、よく言われた医の倫理の標語であると思われる。この言葉は「医は仁術なり」と同様に、大変含蓄のある言葉である。

「医は意なり」も、「医は仁術なり」の言葉の流行を起した曲直瀬道三に深くかかわっている。彼の主著・『啓迪集』の自序に「医は意なり」の言葉が引用されている。『啓迪集』とは、当時の碩学・周良策彦の題辞が付せられて、正親町天皇に献上された医書である。その自序には「吾脩、生縁ヲ洛嚙ニ稟テ、医術ヲ利陽ニ学ビ、志ヲ救恤ニ励シ、業ヲ宇内ニ布カントス」に始まり、「泰定ノ養生主論ニ曰ク、病者ハ必ず医ヲ謀リ、医者ハ必ず其ノ術ヲ謀ルト。岐黄ノ問答ハ医ノ法ナリ。臨機応変ハ医ノ意ナリ。医意ヲ以テ聖法ヲ用ユルコト、妄意ニ非ザルナリ」と、用いている⁽⁶⁾。蛇足と思われるが、右記の文章を解説すると、次のようになる。「私、曲直瀬道三は縁あつて鴨川の辺りで生まれ、医学を足利で学んだ。私の意志は病人を一生懸命に救済し、医学を全国に普及させよう」と決

意した」。そして、「元の泰定の年号の時に著された『養生主論』には、病人は必ず医者が自分の病気を治すことができるかどうかを心配するが、医者も必ずその病人の治療をどんな医術を用いたらよいかを付度する。岐伯と黄帝の問答を示した『素問』『靈樞』は医学の根本法則を示した医書である。機に臨み、変に応じた医学は、医者の誠意ある心を尊重した治療法である。それ故に、医者が選んだ誠意のある医療は神聖なる医療法で、けっして妄りな自分勝手な医療法とは言えない」と。

こうして曲直瀬道三は、従来の仏説に基づいた医療を廃して、新しい臨機応変の医学を唱えたのである。その臨機応変の医学は、医者の考え方が十分に反映される点で、まず、病人を思いやる心が重要になってくる。従って、医者自身の意志が尊重された医療観と言うことになろう。臨機応変の医学が真に実践されるためには、医者の倫理観が重要になってくる。この柔軟な医療観は、「医之意」や「医意」を生かすことができ、実際の医療状況に応じた医療ができるので有用である。こうした点から、曲直瀬道三は臨機応変の医学において「医は意なり」という言葉を李朱医学の『局方發揮』から引用したのであろう。

この「医は意なり」は、李朱医学の中心人物である朱丹溪が著した『局方發揮』に示されている。ここでは、「医ハ意也。其ノ伝ヲ以テ的ト雖ドモ、造詣ガ深シト雖ドモ、機ニ臨ミ、変ニ応ジテ、敵ニ対シテ之ノ将ニ、舟ヲ操ル之ノ工ノ如シ」とある。医師は、今までの医療法が的確であったとしても、また医学知識に造詣が深いとしても、臨機応変に対処し、まさに敵と戦うように、船を船頭がうまく操縦するように治療しなければならぬ。

以上のことから、臨機応変の医学とは、医師が病人の症状を的確に捉えて、自らが誠意をもって、自らが信じる治療法だけではなく、他の医療法をも選択しゆくという柔軟な医療法である。こうして新しい医学をもたらした曲直瀬道三は、朱丹溪の「医は意なり」を重要な倫理的語句として用いたのである。その「医は意なり」とは、医療

において「意」を、単に病人を思いやって誠心誠意を尽くすという意味だけでなく、多くの医学知識や医学技術を実践の場において適切に選択して、倫理的に行うことを説いた柔軟な医療観を示した言葉である。

(三)

安永五年（一七七六）の四十三歳の折に大坂・尼ヶ崎で医業を始めた国学者・上田秋成も「医は意なり」を好んで用いている。彼は「医は意なり」を、医者が病人を誠心誠意をもって治療し、病人を医療を通して慈しみ、思いやる倫理的な愛情のことと考えている。彼は『雨月物語』の作者として有名であるが、この医の倫理的な言葉は『胆大小心録』の中で用いている。少し長い引用であるが、「医は意なり」の部分を中心に紹介してみると、「翁商戸の出身、放蕩者ゆえ、家財をつみかねたに、三十八歳の時に、火にかかりて破産した後は、なんにもしつた事がない故、医者を先学びかけたが、村居して、先病をたくさんに見習ふた事しやあつた。四十二で、城市へかへりて、業をひらいたが、不学不術のはつの事故、人の用いぬ事はしつてゐる故、ただ医は意しやとこころへて、心切をつくす趣向がついて、合点のゆかぬ症と思えば、たのまぬ日に二三へんも、見にいた事しや。いやいやと思へば、外の医士へ転じさせても、相かわらず日々見まふた事しや故、病人もよろこぶ。家族もとかく、うけがよかつたで、四十七の冬、家を買て、さっぱり建直して、四十八の春うつた。十六貫目入たが、なんてやら出きた事しや。医になる始に、願心を立て、金口入、たいこ持、仲人、道具の取つきは、せまいといふて、一生せなんだ事しや。それ故、癩症がくるしめて、五十五の春から、又医をやめて、二たびの村居、母が前へひたいをつけて、不幸な罪此上なし、と申たれば、…」の如くである。

上田秋成は、四十二歳で開業したかと思うと、五十五歳の時に突然に廃業して、養母のところへ帰っている。彼

は、香川修庵の門人である儒医・都賀庭鐘から医学を学び、医の職業使命観も教授されたものと思われる。当時は、医療が渡世の術と捉えられ、金儲け主義とか、太鼓持ちのような医師が多かったようである。医師の風紀が乱れ、頹廢的な風潮の時代であった。ところが、こうした医師の風潮の中で、上田秋成は自らが信じる医の倫理の標語「医は意なり」を実践しようとしたのである。彼は医療を単なる技術と考えずに、「医は意じゃ」と心得て親切に病人を診ようとした。秋成は病人の診療にあたっては、日に数度も、往診に行っている。医の倫理が荒廢している時代にあつて、彼は自らの医学知識や医学技術を「不学不術」と捉えて、医の倫理的な医療態度でもって医療技術を補おうとした、数少ない善良な医師であつた。彼の『自伝』には、彼が突然に、医業を廢業した理由が示されている。「くす師の業を十五年が間つとめしに、若きより学び知らぬ事なれば、探る探るおぼつかなき事のみなりき。行はれぬが幸なりし中に、走馬疝を見誤りて、いたいけなる娘ひとり殺したり。親は我見あやまりとも知らず、定業として後々までも親しく招かれしは、心内いと恥かしき事なりし。拙業なれば、はつかの年を渡りてやめられば、世ののら者となつて、歌よみ、文かきて遊ぶ」と^⑩。これを読むと、秋成の医業の廢業は誤診によつて娘を死なせてしまった、という倫理的な呵責にあつたと思われる。当時の医師の頹廢的な風潮を考えると、秋成の医師としての真摯な態度や良心は、今の医師にとつても考えさせられるところである。

だからこそ、上田秋成は医業の信条を「医は意なり」としたのであろう。従つて、彼は医療を単なる技術としたのではなくて、病人を誠心誠意をもつて思いやり、親切に献身する倫理的な職業と捉えたのである。つまり、彼にとって「意」とは、病人に誠意を尽くす心を意味していた。秋成は医学の修業年数が少なかったことを自覚していたので、未熟な医療を補うために、親切に病人を診る心が大切であると考えたのである。

それにしても、腐敗した当時の医療状況において、上田秋成の真摯な医療態度は、貴重であり、彼の「医は

意なり」の信条は自らの医の倫理を実践しようと努めた点で、数少ない病人を想う医師として喝采をおくりたい。

(四)

「亀問学」を確立した儒医・亀井南冥は、寛保三年（一七四三）に福岡県早良郡姪ノ浜村（福岡市西区姪浜）で生まれた。医学は大坂の永富独嘯庵に学び、九州では村井琴山と並び称された儒医であった。南冥の学識は深く、その息子・昭陽も広瀬淡窓を育てたほどの人物であった。南冥の医の倫理観は、『古今齋以呂波歌』、『南冥問答』、『弁惑論』に示されている。『古今齋以呂波歌』の中に「医は意なり」の語句が使われている。

『古今齋以呂波歌』は、文化年間に書かれたものであるが、『亀井南冥・昭陽全集』には天保十年（一八三九）の写本が転載されている。そこには、後藤良山の五世・後藤古溪と摩島長弘の「序」と広瀬淡窓の「題辞」が付せられている^⑪。この著作は「以呂波歌」とあるように、「いろは」四十八文字の音が文頭に付せられて、四十八首の歌が示されている。そこには、医の倫理、医師の職業使命観、心得るべき医学知識や医学技術、病人を思いやる心などが南冥自身の医学観を交えて詠まれている。その脇に門人の後藤逸が各々に解説を附している。

亀井南冥の医学観は、師の永富独嘯庵に医学教育を受けている影響もあって、ひとつの医家に拘泥せず、効能を重視して、他の医療法も採用しようとする態度をとっている。つまり、民間の秘薬であろうが、他説の医療法であろうが、病状の改善や有効な処方であろうと思えば、当意即妙に用いようとする態度である。こうした彼の医学観には、「医は意なり」が大変適切な倫理的な信条となって生きることになる。

亀井南冥は『古今齋以呂波歌』の「い」の項で「医ハ意ナリ。医ト云者ヲ会得セヨ。手ニモ取レズ画ニモカカレズ」と詠んでいる^⑫。つまり、医学とは感覚で知るのではなく、心で捉える学問である、と。この歌に対して後藤

逸は次のような註解を試みている。「夫れ医は小数であると雖も、枢機あり。変に合して貴をなす。能く変に合する者は意なり。意は是に於いてか、医に於いて貴し。夫れ意は自持に在り。筆と舌とが「可」とすべき所にして象を得るなり。三は臂を折り良医となす。之を自得と謂うなり」。次の「ろ」の歌は、「論説ヲヤメテ病者ヲ師トタノミ、夜ヲ日ニツイデ工夫鍛練」と詠み、以下、彼の医の倫理観や医師のあるべき姿などが「はにほへと：順」に詠まれている⁽¹³⁾。

この『古今齋以呂波歌』の巻頭には、門人・後藤逸が師の亀井南冥の医療観を示す「医は意なり」の言葉をもつて次のように紹介している。「古人、言あり。医は意なりと。亀先生、之を広く曰、医は意なり。意は学により生ず。方に新古なし。要は治を期するにあり。蓋し意は一なり。方は萬なり。一意は萬方を運ぶ。何ぞ新古に有らんや」とある⁽¹⁴⁾。つまり、治療においては『傷寒論』一辺倒ではなく、医を業とするものは医療の是非を正しく理解し、病状に応じて自由に治療すべきことを説いている。ここに「医は意なり」の考え方が生き、南冥をして「医は意なり」が重要な役割を演じさせているのである。

このように亀井南冥は『古今齋以呂波歌』において、一般庶民の解り易い平易な歌でもって医の倫理観を示したが、『南冥問答』においても平易な言葉で医の倫理的な心情を示している。

なお、亀井南冥は永富独嘯庵の『漫遊雜記』に「序文」を載せ⁽¹⁵⁾、独嘯庵没後は彼の息子・龜山を引取り、養育し、立派に成人させて、五島候に出仕させている。こうした点からも南冥の他人を思いやる態度は、人間としても医師としても、十分に評価されるべき人物であると言えよう。

天保七年（一八三六）、緒方惟勝は『杏林内省録』の「卷之三」において「医は意なり」の言葉を用いて、当時の腐敗した医師を皮肉を込めて、高慢を戒めている。「人・心視機関（のぞきからくり）二曰。医者意ナリト確言萬事二通ズ。医者衣也。衣服ヲ美ニス。医者威也。威儀敦重ニス。医者異也。異言異体ニス。医者夷也。動モスレバ人ヲ夷フ。医者稲荷也。尾ヲ不出シテ、人ヲ誑カスト。奥先生曰ク、医者居也。父祖ノ餘蔭ニテ居ナガラ大医トナル。医者飴也。アメヲ子ブラスヲ術トス。医者唯也。何事モハイハイ云テ承諾ス。医者慰也。病者ヲ誑シテ慰メルヲ善トス。医者困也。カコイニテ、杓ヲフルヲ務メトスト。予又曰ク、医者位也。位階ニ上ル程、薬代厚シ。医者以也。弁ヲ以テ、人ヲ誑シ、一ヲ以テ九倍ス。医者痿也。腰スケザルニ、駕ニノル。医者葦也。立ノビル程、折レ易イ。医者違也。言行相違スルナリ」とある⁽¹⁶⁾。このように彼は、当時の医師の態度を「医は意なり」の字音から風刺的に表したのである。

緒方惟勝は、字を「義夫」といい、「撰生堂」と号した備前・岡山の医師である。父は備前の藩医・緒方彭勝で、惟勝は山脇東海に医学を学び、京都・室町にて開業した。生没年は不詳であるが、天保年間に没しているらしい。彼の著作は、『撰生堂随劄』、『医事難問』、『療治諸訓』などがあり、医の倫理にも関心があったらしく、医師の弊風を批判した記述もある。

(六)

江戸時代の医師の頹廢振りは、武陽隠士の『世事見聞録』に見られる。⁽¹⁷⁾ 平田篤胤の『志都能石屋』で、『醫道大意』ともいわれる医書の表紙の左上に「医者意也」の文字が示されている。⁽¹⁸⁾ そこには、当時の荒廢した医師の態度が示されて、医の倫理が実践されるような状況ではなかったことが推測できる。心ある医師が僅かに医の倫理

の実践に心掛けた程度であつた。ほとんどの医師は、金儲けや功名に走り、無学と口先で医療を渡世の術として行つていた。

医の倫理の荒廃を憂い、医の倫理の実践に努めた数少ない医師が、「医は仁術なり」や「医は意なり」を唱えていた。それらの医師が先述の人物たちである。他に「医は意なり」を示した人物にあの有名な本草学者の貝原益軒がいる。益軒は香月牛山著の『医学鉤玄』の序文において「医は意なり」を引用している。「許胤宗云ウ事アリ。医ハ意ナリ。思慮精シケレバ、則チ之ヲ得ルト。如何。後世ノ医ヲ業トスル者、菌莽ニシテ、深ク其ノ理ヲ究メズ。粗庸ニ安ンジテ、其ノ職ヲ廢スレバ至ル。夫レ生ヲ好ミ、徳ヲ積ム術ハ、医ヲ第一ト為ス。医ヲ学ブ者ハ、苟モ能ク心ヲ用イテ、慮ヲ精シクシ、十年其ノ術ヲ究メレバ、則チ、身ヲ終ワリマデ、受用シ尽クサズ」と彼は述べている⁽¹⁹⁾。つまり、益軒が示した「医は意なり」とは、医学に精通した医師が倫理的な心をもって医療を行うという意味であると推測できる。

また、室町時代の医師・吉田宗桂は、通称「意安」と称し、周良策彦に伴われて明に渡っている。彼の通称の「意安」は、「医は意なり」の標語に関係している。彼は「診治、神察アルヲ以テ、意安ト明ス。蓋シ、医ハ意ナリ、トノ義ニ取レルナリ」と『寛永系図伝』に書かれてあるという⁽²⁰⁾。宗桂の医学知識や医学技術は中国は、神靈に達したと解され、人々から尊崇されたのであろうか。

なお、「医は意なり」の古い出典として『後漢書』と『旧唐書』を紹介してみよう。『後漢書』の「列伝・第七十三」に「郭玉」の項があり、そこには、「対ヘテ曰ク、医ノ言ノ為ス意也」⁽²¹⁾とある。また、『旧唐書』の「列伝・卷百四十一」の「許胤宗」の項には、「許胤宗曰ク医ハ意也。人ノ思慮ニ在リ」⁽²²⁾とある。荒井保男先生が「古い言葉」と述べているように⁽²³⁾、江戸時代に造語された、和製の医の倫理の標語ではない。

以上のことから「医は意なり」という医の倫理の標語は解り難く、大変含蓄のある古い言葉であることがわかった。しかし、この「医は意なり」を江戸時代の若干の医師は、座右の銘として捉えて医の倫理の実践に努めていたものと思われる。結局、私は「医は意なり」の概略は理解できたものの、真の意味は、結局わからなかった。漢和辞典を見ても²⁴、大体の意味はわかるものの、この言葉は医学の蘊奥を示しているようで、明確にわからなかった。そこで、私は大塚恭男氏の「医は意なり」を紹介している文を引用して、それを結論としてみたい。と言うのは、自らの医学を指示しながらも、他方の医学も尊重して、臨機応変に病状に対処して行こうとした点で、この「医は意なり」の説が最も適した解釈と感じたからである。「医師が臨床の場において、的確な判断を下すためには、通り一遍の教科書の知識は役に立たないものである。機に臨んで、変に応じた処置を決定するが、すなわち意であつて、意は深い学問によつて、初めて体得されたものである。昔に医聖の手になつた方法であつても、そのみを金科玉条とするのは間違っているように、最新流行の方法に無批判に従うのも考えものである。医師の使命は患者を治すことにあるのであつて、それ以外の何もの出もない」²⁵。

参考・引用文献

- (1) 関根透、『日本の医の倫理』、学建書院、八三―八六頁、一九九八
- (2) 李時珍、『註頭国訳・本草綱目』・第一冊、春陽堂、一三三頁、一九二九
- (3) 曲直瀬道三、『切紙』（影印版）、近世漢方医学書集成・4、名著出版、七頁、一九八三
- (4) 徐春甫、『古今医統大全』、卷之三下、医道（版本）一五五六
- (5) 蒲原宏、『医は仁術也の原典』、「日本医事新報」、二四七三号、一三九頁、一九七一

- (6) 曲直瀬道三、『啓迪集』(影印版)、近世漢方医学書集成・3、名著出版、一六〇二〇、一九八三
- (7) 富士川游、『日本医学史』、裳華房、二六六頁、一九〇四
- (8) 朱丹溪、『局方發揮』(影印版)、和刻漢籍医書集成・第六輯、エンプライズ社、四七三頁、一九八九
- (9) 上田秋成、『膽大小心録』、上田秋成全集・第九卷、中央公論社、一七二頁、一九九二
- (10) 上田秋成、『自伝』、上田秋成全集・第九卷、中央公論社、二七一頁、一九九二
- (11) 後藤古溪、摩島長弘、『古今齋以呂波歌』「序」(影印版)、亀井南冥・昭陽全集・第一卷、葦書房、四二二～四一五頁、一九七八
- (12) 亀井南冥、『古今齋以呂波歌』(影印版)、亀井南冥・昭陽全集・第一卷、葦書房、四一六頁、一九七八
- (13) 亀井南冥、『古今齋以呂波歌』(影印版)、亀井南冥・昭陽全集・第一卷、葦書房、四一六頁、一九七八
- (14) 亀井南冥、『古今齋以呂波歌』(影印版)、亀井南冥・昭陽全集・第一卷、葦書房、四一五頁、一九七八
- (15) 亀井南冥、『医聖永富独嘯庵』(影印版)、日本漢方の古典・3、東京医学薬学古典研究会、一〇四～一〇五、一九九七
- (16) 緒方惟勝、『杏林内省録』、杏林叢書・上卷、思文閣、三二四～三三五頁、一九七一
- (17) 武陽隠士、『世事見聞録』・卷二、青蛙房、一五五～一五九、一九六六
- (18) 平田篤胤、『志都能石屋』、『医道大意』、新修平田篤胤全集、第十四卷、名著出版、四二二～五〇六頁、一九七七
- (19) 貝原益軒、『医学鉤玄』(序)(影印版)、臨床漢方診断学叢書・第十八卷、オリエント出版社、一一〇頁、一九九五

- (20) 富士川游、『日本医学史』、裳華房、一九九頁、一九〇四
- (21) 『後漢書』上・二十四史・(四)、台湾商務印書館、三八一八頁、一九六七
- (22) 『旧唐書』下・二十四史・(一九)、台湾商務印書館、一五七〇三頁、一九六七
- (23) 荒井保男『医の名言』、中央公論社、一二五頁、一九九八
- (24) 服部・小柳、『詳解漢和大事典』、富山房、七二八頁、一九五二
- (25) 大塚恭男、『医は意なりをめぐって』、『日本医事新報』、二二七九号、四四、四五頁、一九六七